様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０１１

研究課題名（和文）帝政期ローマの修辞学校における模擬弁論と教育

研究課題名（英文）Declamation and education in the rhetorical schools during the Roman empire period

研究代表者
吉田　俊一郎（YOSHIDA, Shunichiro）

東京大学・人文社会系研究科・助教

研究者番号：００７３８０６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、紀元後１世紀頃の古代ローマ帝国における修辞学（弁論術）の働きを、修辞学校におけるその訓練、特にその中心にあった模擬弁論（練習用の架空の弁論）に焦点を当てて解明するものである。模擬弁論はしばしば非現実的・非実用的とみなされるが、本研究はその教育的価値を重視している。本研究は、この時代の文献における言及から、模擬弁論が修辞学校でどのように行われ、いかにして修辞学の教育として有効に機能しえたかを示した。

研究成果の概要（英文）：This research investigates how rhetoric worked in the 1st century CE, focusing on the exercises in the rhetorical schools, especially on declamations, which was the most important of them. While declamation is often regarded as impractical and useless, this research puts emphasis on its educational value. It has shown from references in the literatures of this period how declamation was conducted in the rhetorical schools and how it could function effectively as an education in rhetoric.

研究分野：西洋古典学、特にラテン散文・修辞学

キーワード：西洋古典学　ラテン文学　修辞学　レトリック

１．研究開始当初の背景

本研究の開始に至った研究背景は以下の通りである。研究代表者のこれまでの研究は、ローマ帝政期の修辞学の理論と実践との関係についてのものであった。ローマの弁論は、紀元前一世紀後半の帝政の開始に伴って、元老院での政治的決定や政治性を帯びた重大な公的裁判に関与するという、従来共和制の下で担ってきた役割から後退せざるを得なくなった。この間、修辞学を身に着けたものの政治的活躍の場を奪われた人々は、そのいわば代替の場として、修辞学校における練習のための架空の弁論、すなわち模擬弁論（declamatio）に成人後も関わるようになったと考えられている。このような修辞学校における変化は、その外部にも大きな影響を及ぼした。その一つは、修辞学理論そのものに対するものであり、もう一つは修辞学とは直接結びつくわけではない文学一般に対するものである。研究代表者はこれまで、以上の三点、すなわち帝政最初期における模擬弁論の成立、その修辞学理論への影響および文学一般への影響について、それぞれ個別の著作家を取り上げて研究を行なってきた。すなわち、模擬弁論の成立については大セネカの模擬弁論集（紀元後 30 年代に成立）、修辞学理論へのその影響については後一世紀末の修辞学理論書であるクインティリアヌスの『弁論家の教育』、文学への影響については紀元後 30 年頃に書かれたワレリウス・マクシムス『著名言行録』の分析を行なった。これらの三つの著作についての研究を通じて、帝政期において修辞学が模擬弁論に重きを置くようになり、そのことが修辞学理論や他の文芸活動一般に大きな影響を与えるようになった過程についての考察が行なわれた。この中で、この時代の修辞学が文芸活動（より広く言うならば知的活動全般）に及ぼした影響力をより適切に理解するためには、修辞学校における教育の役割を再考する必要があると考えるに至った。模擬弁論が本来は修辞学校において弁論能力を訓練するためのものであったことは知られている。にもかかわらず従来は、帝政期の修辞学やその文学への影響を論じる際には、模擬弁論の非実用性・非現実性が強調されることが多かった。しかし模擬弁論は帝政期を通じて修辞学校という教育の場で用いられ続けたのであり、その教育的側面を軽視することはできない。大セネカについての研究代表者のこれまでの研究では、彼の分析の枠組みが、修辞学校における模擬弁論のあり方に即したものだったという見通しが得られていた。この点を手がかりにして、帝政期における模擬弁論という現象を教育現場の観点から捉えなおすことが必要であると考えられるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、ローマ帝政期における修辞学の実態を、修辞学校におけるその訓練、特にその中心にあった模擬弁論（練習用の架空の弁論）に焦点を当てて解明することである。従来、帝政期の修辞学や、その文学への影響を論じる際には、模擬弁論の非実用性・非現実性が強調されることが多かったが、本研究はその教育的側面を重視する。このために、帝政期ローマの修辞学文献や文学において修辞学校での教育に言及している箇所を包括的に考察して、その実態を明らかにするとともに、現存の模擬弁論自体の内部構造の分析を通じて、教育課程として模擬弁論がどのように機能したかを考究する。

３．研究の方法

既に述べたように本研究の課題は、ローマ帝政期の修辞学校における模擬弁論による教育の実態の解明であり、このために本研究では、以下のような方法を用いた。まず、ローマの教育についての諸研究に基づきつつ、当時の教育の、とりわけ修辞学校における課程の全体像を描き出す。続いて、学校における修辞学教育を描写している帝政期の文献の分析に基づいて、模擬弁論が修辞学校でどのように取り扱われていたかを把握する。この際には二種類の文献を研究対象とする。まず一つめは、修辞学校での教育の実態そのものに言及している文献である。ここでは、既に大きく扱ってきた大セネカと並んで、クインティリアヌスの名で伝えられる『小模擬弁論集』（Declamationes Minores）が重要である。これは様々な主題に基づく模擬弁論（の一部）の集成であるが、それだけではなく、個々の主題をどのように弁論すべきかを教師が生徒に説明している「講話」と呼ばれる部分が付属している。これは修辞学校における教育の実態を解明する上で非常に重要な文献であるにもかかわらず、そうした観点からの研究はまだ十分ではない。本研究では教育制度としての模擬弁論の実態やその効果について明らかにするために、この箇所の考察に力点を置く。二種類めの資料は、模擬弁論自体である。大セネカにおける模擬弁論の引用については既にこれまでの研究でも扱ってきたが、この資料は、模擬弁論のうち最も華やかな箇所のみの断片的な引用の集成であり、或る一つの模擬弁論全体がどのような構成になっているかを示すものではない。しかし修辞学校における実際の訓練では弁論全体を弁じることが訓練されたはずであり、この訓練が教育においてどのような意味を持ったかは、模擬弁論全体の構成やそこにおける論証のあり方を検証しなければ把握できないものである。この点で最も重要な資料は、クインティリアヌスの名で伝わる『大模擬弁論集』（Declamationes Maiores）である。これは後二世期以降のものと考えられるかなり後代のものではあるが、19 の模擬弁論

の全体を収録し、かつそのうちに同一主題を両方の側から論じた2組の弁論を含んでいるという点で貴重なものである。本研究では、模擬弁論が訓練としてどう扱われ、どれほど効果を挙げていたか考察するため、これらの弁論における論証や、告発・弁護をより説得的にするためのその他の工夫などを詳らかにする。

最後に、本研究の全体を通じて特に注意を払われる点の一つはテクストの検証である。本研究は古代ラテン語およびギリシャ語の文字資料の読解に依拠している。これらの資料は、それが書かれた古代から、現在我々が直接見ることができる写本が書かれた中世に至るまでの千年近い間、書写によって伝えられてきたものであり、そのためそのテクストは、誤写や脱落といった様々な問題を含んでいる。それらを修正して資料を本来あるべき姿に復元する本文批評の作業は、こうした資料に依拠する者にとってきわめて重要である。本研究の直接の目的は本文批評ではないが、使用する資料についてはこのような研究の蓄積も十分とは言いがたいので、近現代の諸校訂者の版にある本文批評のための脚注（所謂 apparatus criticus）を活用して、本研究で使用するテクストの信頼性を常に検証する。文字資料から古代の実態を解明するという手法を採る本研究が確実な基盤の上に成立するようにするために、このような手法は不可欠であるためである。

４．研究成果

本研究の結果として明らかにすることができたのは以下の諸点である。まず、修辞学校での教育の実態そのものに言及している文献の研究においては、クインティリアヌスの名で伝えられる『小模擬弁論集』において、個々の主題をどのように弁論すべきかを教師が生徒に説明している「講話」と呼ばれる部分の内容を詳細に検討した。その結果、修辞学校における模擬弁論による教育は、基本的には、実際の法廷における弁論の中で有効な議論を発見し、それらを組み立て、説得的に議論するという、修辞学の本来の目的に沿ったものであり、しばしば想定されるような表現の華美さや大げさな実演がそれ自体で追及されることはなかったと想定できることが示された。

この他、クインティリアヌスの『弁論家の教育』やタキトゥスの『弁論家についての対話』といった、紀元後100年前後の修辞学文献において学校教育に言及している部分や、狭義には修辞学的と考えられない文献の分析、たとえばペトロニウスの小説やユウェナリスの諷刺詩などにおける当時の風習の活写も行なった。その際には、これらに見られる模擬弁論や当時の修辞学の有効性や健全性は、当時の修辞学的著作やその他の文学において好まれたいわば定番の話題であるということを考慮して、そこで行なわれている議論がどこまで実態を反映していたかについて、個々の著作家の専門的な研究も参照しつつ、その内容と文脈とを慎重に見極めた。その結果、修辞学校の教師の側からは、模擬弁論を中心とした当時の訓練が教育の有効な手段として尊重されていた様が明らかとなった。また、修辞学校の特徴として伝えられている様々な要素が、この手段が実際の生徒に対して効果を発揮できるようにすることや、その効果を他の人々（たとえば生徒の親など）に理解してもらうことを目的としていたことも示唆された。さらに、とりわけ非修辞学的な文献における修辞学校の描写は、しばしば「弁論の堕落」という当時好まれていた考えに基づく定型的な批判に強く影響されており、必ずしもその批判が実際にあたるわけではないこと、批判が修辞学校における教育の一面だけしか強調していないこと、批判者自身が修辞学校において身に着けられるような修辞学を用いていることなどが示された。

さらに、模擬弁論自体の分析においては、大セネカの著作の中の「分割」と呼ばれる、弁論の議論の構造を示した部分を参考にしつつ、クインティリアヌスの名で伝わる『大模擬弁論集』に収録された複数の模擬弁論の議論の構造の解明を行なった。この結果、模擬弁論が、実際の裁判における複雑な法的仕組みは省略しつつも、そこにおける告発・弁護の際に取りうる様々な戦略を基本的には踏襲して議論が構成されていることが示された。また、模擬弁論におけるしばしば入り組んだ逆説的な議論も、一見それ自身のためになされているかのような華美な表現の集積も、そうした告発・弁護をより説得的にするための工夫であると考えられることが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①<u>吉田俊一郎</u>、「大セネカの修辞学理論と模擬弁論の関係について」、『西洋古典学研究』第63号、2015、87-98（査読有）。

②<u>吉田俊一郎</u>、「has translaticias quas proprie sententias dicimus (Sen. Con. 1.pr.23)」、『フィロロギカ』第11号、2016（掲載決定済、査読有）。

〔学会発表〕（計　２件）

①<u>吉田俊一郎</u>、‘Political Crisis in the Rhetorical Works of the Early Roman Empire’, *Fifth International Symposium on European Languages in East Asia,* 2014年10月25日、

台北（台湾）。

②吉田俊一郎、「ローマ帝政初期の模擬弁論と歴史記述」、2015 年度西洋史研究会大会、2015 年 11 月 15 日、立教大学（東京都・豊島区）。

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　俊一郎（YOSHIDA, Shunichiro）
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：００７３８０６５